

アニキ・ボボ (1942)

ANIKI BOBO

メディア 映画

ジャンル

製作国 ポルトガル

色彩 B&W

時間 71分

公開情報 劇場未公開・NHK衛星第2で放映

【解説】

現在、最も注目すべき仕事を連発する老匠オリヴェイラの劇映画デビュー作。教育的内容を持った児童映画だが、初期の小津作品を思わず、少年心理の把握の確かさ、描写の簡潔さと深みは今にも通ずる見事さだ。ヒロイン的な少女が大人びて美しいのも、彼の女性に対する審美眼を示すようで好ましい。ロドリゲス・デ・フレイタスの詩にインスパイアされた脚本はオリベイラ自身の作。アニキ・ボボ、アニキ・ベベ…というかけ言葉で“泥棒と刑事ごっこ”の役決めで唄われる童謡が主要モチーフになっている。カルトリスはクラスのアイドル＝テレジニヤをめぐって、ガキ大将エドゥアルドと争っていた。エドゥアルドは乱暴で、いっばしの不良ぶる少年。雑貨屋の親父は子供がなく、彼らを親しげに眺めるが、商売には厳しい。ある日、そのウインドウに飾られた人形をうっとり眺めるテレジニヤを見たカルトリスは彼女に人形を買ってやりたく思い、つい盗んでしまう。その夜、騎士のように窓からテレジニヤの部屋に忍んで人形を贈るカルトリスは有頂天だった。しかし、泥警ごっこの囃し唄にも肝の縮む思いの罪悪感にさいなまれ、そこで泥棒役を押しつけられそうになってカッとして、エドゥアルドと取っ組み合いになる。その直後、通りかかった汽車に手を振るエドゥアルドは足を滑らし鉄路脇に落下、大怪我をするが、これがカルトリスのせいにされてしまう。しかし、その様子を雑貨屋が目撃しており、彼は窮地を救われ、人形を感謝の気持ちと共に返すと、雑貨屋は改めてテレジニヤにプレゼントした。教室の場面なども実に計算が行き届いて（罰でみなに背を向けて座らされた少年と教師のやりとりなど）見どころは多いが、興行的に失敗。オリヴェイラは以後14年、家業の織物業などに専従。再び劇映画を作るのはそれから更に7年後のことだった。

【クレジット】

監督 マノエル・ド・オリヴェイラ Manoel de Oliveira

脚本 マノエル・ド・オリヴェイラ Manoel de Oliveira

出演 ナシメント・フェルナンデス

フェルナンダ・マトス

オラシオ・シルバ

ビタル・ドス・サントス